

酩と錆色



クトゥルフ神話 TRPG

酩と錆色

彼の紡ぐ言葉が、貴方にどのような温度を与えようとも。

※ 本作は、「株式会社アークライト」及び「株式会社 KADOKAWA」が権利を有する『クトゥルフ神話 TRPG』の二次創作物です。

Call of Cthulhu is copyright ©1981, 2015, 2019 by Chaosium Inc.
;all rights reserved. Arranged by Arclight Inc.

Call of Cthulhu is a registered trademark of Chaosium Inc.
PUBLISHED BY KADOKAWA CORPORATION 「クトゥルフ神話 TRPG」



本シナリオは TRPG ライツ SPLL 「E108122」 取得済みです。

■ 概要

人数：KPCとのタイマン

推定時間：ボイセ4～6時間程度

推奨技能：探索技能

ロスト率：低～中

※継続でもできないことはないが、PC・KPC共に新規推奨。

（特にKPCは新規をお勧めします。）

※初対面が好ましい。

※低SANの探索者は非推奨

■ PC

あなたは援助交際で日銭を稼いでいる。

※性別は不問だが、男KPC×男PCで描写しているため改変が必要。所謂、受け攻め関係も同様。

■ あらすじ

君はいつものように春を売り、いつものように対価を得る。

そうして安っぽいラブホテルを後にし、人通りの少ない路地で男と別れた。

いつも通り。いつも通り、だと思いたかった。

静かな路地にシャッター音が響き渡る。

「あは、本当にエンコーしてたんだ。PCくん」

スマホを構えて艶美に微笑む彼は、心底楽しそうにに笑っていたのだ。

■ 備考

- ・探索者は大学在学中の学生である
- ・R18に抵触する性描写
- ・グロデスク、暴力表現
- ・道徳、倫理観に欠ける描写
- ・同意のない性行為の描写
- ・神話生物の独自解釈

■ お願い

- ・トレーラーの無断転載、自作発言、当シナリオ以外での使用は不可です。（卓募集等には使って頂いて構いません）
- ・シナリオの二次配布、本文の転載、ワンクッションを置かないネタバレ発言や画像の投稿はお控えください。
- ・18歳以下の方はプレイ、閲覧等しないでください。
- ・ネタバレを含むツイートは必ずふせった一等のご利用をお願いいたします。

■ 真相

PC・KPCはマホロバPSI研究所の元被験者である。

大学での健康診断結果を横流しされ、その結果2人は治療という大義名分でPSI研究所に送られてしまう。研究所としては有望な素質をもつ2人をシステム研究に利用した後、研究所とPSIの記憶を封印し元の生活へ戻す予定だった。しかし後遺症として殺人癖を発症したKPCは（真実はシャッグイからの昆虫による寄生）、研究員数名を殴りつけて瀕死の状態にまで追い込んでしまう。

このまま外に帰すわけにもいなくなかった研究所は、同じく実験に使いヒーリング(心霊治療)のPSIを得ていたPCを記憶操作の上恋人としてあてがう。死なないPCをサンドバッグに好きなだけKPCに発散させ、早々に殺人癖を押さえ込んでしまおうという算段だ。その際探索者たちを閉じ込めていたのがシナリオ内ラブホテル(を模した研究施設)の一室である。

一定の効果を得られたために試みは終了し、記憶を消去されたうえで2人は日常へと帰された。

ここで問題が生じた。KPCの殺人癖は薄まったものの未だ完治しておらず（シャンの寄生が解けていないため）、更にはPCへの執着を併発してしまったのだ。それについて研究所はあまり問題視していなかったが、監視のため2人の後をつけていた研究員がいた。

その研究員とはPCの援助交際相手である。PCらが被験者として選ばれる前からその関係にあった。彼はPCに強い好意を抱いていたため、PCが自身の研究所の被験者になった時から見守り続けていたのだ。

後遺症の件もあり、このままではKPCがPCを殺しかねないと危惧した研究員。

彼はPCらを救う方法を考えた挙句、アザトースに捧げてしまうことを思いつく。元よりアザトースを信仰していた彼は、そうすることで違いなく幸せになれると本気で思っていたのである。そうして研究員は独断で催眠をかけ、2人をアザトースの夢の中へと送りこんだのだった。

■ 登場人物・その他

○PC

今シナリオの完全なる被害者。研究所の実験によりヒーリング（心霊治療）のPSIを得た。

KPCと同大学なせいで実験時期が被り、ちょうどいいという理由でKPCの殺人癖のサンドバックとして消費されてしまった。そのときの鮮烈なトラウマが記憶消去されてなお漠然と思い出されるのか、シナリオ中の該当シーンでデジャヴを感じることがある。KPCと研究員おじさんにとっての「運命を変えた人間」といういみで、ある意味ファム・ファタールなのだ。

○KPC

DVするヤバいやつ。実験の後遺症によりPCに執着している。

愛情による支配欲か、玩具に対する支配欲かはKPに一任するが（シナリオは後者）、実験前後関係なく一貫してクズである。

研究所が殺人癖だと思い込んでいた衝動は、シャンに寄生されていることによるもの。

サンドバック作戦で殺人癖が治まったように感じられたのは、シャンが「大人しくしていれば解放されること」を理解したため。

…とはいえ、元からクズなら寄生されていてもいなくても素人目に大差などないだろう。

神話的事象からは逃れられるかもしれないが、この人間からは逃げられない。

神に捧げ、この世から消し去りでもしない限り。

○援助交際相手の研究員（モブおじ）

妻子持ちなのにPCに恋しちゃったうっかりおじさん。彼自身、ヒプノーシス（催眠）のPSI持ち。

PC・KPCが被験者として招かれる前からアザトースを認知・信仰している。（とあることがきっかけで深淵を覗き、その狂気から信仰を深めているので実はSAN0）
KPCとPCが接触する前に自分が何とかしてPCを助けようと思っていたが、紆余曲折あってアザトース様にお任せしよう！という結論に至ってしまう。

彼は日常的に疲弊するほどアザトースに生命力を捧げていたので、彼の望みに沿うようアザトースの夢の一部をニャルラトホテプが貸し出し、夢の世界が成立している。

どのエンドでも既にアザトースに自らの命を捧げているので、言ってしまうと確定死亡NPCである。

○マホロバPSI研究所

PC・KPCを被検体として迎え入れた研究所。

実情はアザトースの支配下であり、

ほとんどの研究員・職員が知らずのうちアザトースの為に尽くしている。

○シャッグイからの昆虫

KPCに寄生していた「殺人衝動」の正体。アザトースにKPC、PCを捧げることを目的に、KPCの暴力による快楽を楽しんでいる。

研究所地下に燻っているが、研究員はそれを知らない。

○アザトース

研究所を支配している大本の神。被験者や研究員の生命エネルギーを吸いまくっている。シャンもたくさん生贄をくれる。ほとんどのルートでは真の姿ではなくザーダ・ホーグラとして姿をあらわす。

○ニャルラトホテプ

同僚の正体。高利貸し。

つまりアザトースに二人を捧げたい研究員とアザトースに二人を捧げたいシャンのダブルコンボで大変なことになるシナリオである。かわいそうだね。

■ 本シナリオを回すKPへ

全編通して倫理観の無いシナリオのため、

きちんとPLに確認をとってから遊ぶことを推奨します。

本シナリオKPCの台詞や、PCに向ける感情についてはKPに一任します。

シナリオKPCと同傾向のKPCを作成してもいいですし、実はPCのことが好きだったんだ～みたいな方向性のKPCでも真相的には問題ありません。

ある程度の改変は許容していますので、是非是非ご自身の性癖に沿った設定を積んでみてください。

※※次ページよりシナリオ本文※※

■ 導入

安っぽく軋む耳障りなスプリング、欲にまみれ醜く地を這う吐息、本能に任せ肉を貫く水音がその部屋の全てだった。

貴方は今、名も知らぬ男の熱を受け入れ、されるがままに揺すられている。中年男性のだらしない身体から成る確かな重みが、唸る肉に陰茎を埋め込むのを手伝っている。浅ましく自分を求める男の身勝手な律動が、貴方の下腹を溶かしていった。

生暖かい吐息が首元にかかれば、ぞわりと嫌悪感が走った。下肢を撫ぜられ反射的に太腿を擦り合わせれば、貴方の媚肉は男のモノをさらに強く、きゅう、と締め付ける。

思わず甘い嬌声をあげ頭を擡げたとき、床に投げ出された何かが視界の端にちらついていた。

<目星>

成功

→それは男の鞆から飛び出てしまった書類…のような紙束だった。細かな文字は掠れて読めないが、辛うじて見出しのような部分は認識できた。

「研究報告書」「対象の変化過程」「後遺症について」、男について詮索したことはなかったが、何かしらの研究職に就いているのだろうか。言葉の意味は分からないが、何処かひっかかりを覚えるだろう。

失敗

→それは男の鞆から飛び出てしまった紙束だった。揺すられ上下する視界では文字を捉えることは困難だが、男の仕事関連の資料だろうと推測できるかもしれない。

逸れた意識を、水風船が割れるような破裂音が引き戻す。汚らしく掠れた「取引相手」の声が部屋に響いたと思えば、どくどくと波打つ感覚。薄膜越しの生温かさど、萎縮しつつある熱量が、男に吐精されたのだと告げてくる。

シーツを掴み、顔を押し付け、腰をくねらせながら快樂の波に耐える。だらしなく開いた口から唾液が溢れ、枕を濡らした。

(※不感症だったり感じない方が興奮するのであれば描写を変える。)

暫くそうしているうち、濡れた枕の冷えた感覚が貴方の意識を浮上させた。貴方の内側を侵害していた熱が、引き抜かれる。痙攣する下腹部を宥めながら、貴方はベッドに付属したデジタル時計を一瞥した。

「17:00」、貴方の定時だ。

サッとシャワーを浴び、床に打ち捨てられた衣服を拾い上げ、慣れた手つきで身支度を済ませる。ふと、だらしなく裸体を晒していた男が貴方に声をかけた。

「PCくん、今日も良かったよ」

「僕は明日から連日早上がりできないし、会えるまでかなりの辛坊だなあ」

「PCくんは最近大学はどうなの？」

(※PCの個人情報を知りたがりいろいろ話そうとしてくる。資料の内容や仕事については全て誤魔化す。正体は研究所職員なのでPCを心配していることを念頭に入れるといいだろう。あくまで当たり障りなく。)

【RPが一通り終わった】

暫くの談笑後、貴方の顔と時計を交互に見た男は「ああ、ごめんね。これは今日分だよ」とそそくさと草臥れた財布から金を引き抜き、貴方へと手渡す。

<目星>

成功

→受け取った金の他、何かが挟まっていることが分かる。見てみればそれは目の前にいる男性の他、女性と子供が朗らかに微笑んでいる写真だ。隅に赤色のペンで、「6月1日、10歳の誕生日」と書かれている。

一目で家族写真だと分かるだろう。

…これも、貴方にとっては些末なことだ。援交相手の事情など知ったことではないし、ちくりとした罪悪感を誤魔化す術も身に着けてしまったのだから。

失敗

→受け取った金の他、何かが挟まっていることが分かる。それは家族写真のようであったが、一瞬のことでよく視認できないまま男に取り上げられた。

写真の隅に赤文字で「6月1日」と書かれていた気がする。

「ああ、ごめんね。余計なものまで渡してしまった」

男は貴方から写真を返されると、そそくさと身支度を終えて扉の前に立った。

<目星>+20

→受け取った金を財布へ入れる際、まだ何か挟まっていることに気が付く。それは新聞の切り抜きであった。最近会った個人情報流出に関するコラムらしい。

▼「注意！指紋認証の罠」

この情報社会、意外なところに罠があるのを知っているだろうか？。それが指紋認証だ。

今回は指紋認証の抜け道を共有して、犯罪阻止につなげていくコラムである。あ、勿論よいこは真似しないように！

①伝導性インクによるコピー

電気の通る伝導性インクで指紋をコピーしてしまえば簡単に認証してしまう。

②セロテープを使っての認証

方法は簡単。指紋認証装置にセロテープを貼った上で指紋登録を行う、これだけだ。その後はセロテープの上からであれば誰でも指紋認証が可能になる。

③寝てる間に指拝借

…これは言うまでもなく、身内の犯行に多い手口だろう。気が許せる相手なら隣で寝てしまうなんて日常茶飯事だが、その間に指を動かされホームボタンに翳されたら…。

以上、抜け穴が以外にも多いことに気が付いただろうか？読者諸君も、セキュリティ対策はしっかりと行うよう気を付けよう。

・男性に新聞のことを言う

「あ、うっかりしてたよ。でも要らない切り抜きだし…
適当に捨てておいてくれないかな」

チェックアウトの時刻も迫っている。貴方は早急にホテルから出る必要があるだろう。

■ 最悪の出会い

自動精算機で支払いを済ませ、フロントに鍵を返却する。

そうして貴方は安っぽいラブホテルを後にし、人通りの少ない路地で男と別れた。慣れたものだろう。

気持ちが悪いと気持ちが良いは両立するのだと、この行為を始めて数ヶ月程経った時に気が付いた。好意も抱いていない男の体臭は不快だし、熱くにじみ出た相手の汗が自身の身体を濡らすのもひどい嫌悪感を抱かずにはいられない。

しかし自身が相手をどう思っていようとも、身体は悦楽を追い求めて切なく声をあげる。たとえ快感を得られなかったとしても、知らぬ男に身体を貫かれ望むように演じてやる淫靡な行為自体に、貴方は背徳の旨味を覚えているに違いないのだった。

。兔にも角にも、学生の身で金銭的にも困窮している貴方にとって、それは無くてはならないライフワークになっていた。

だから今日も、いつも通り…だと思いたかったのだ。

<聞き耳>

成功

→『パシヤリ』…静かな路地にシャッター音が響き渡る。

何が起こったのか理解する前に、額を嫌な汗が伝う。状況把握のため思考する脳が導き出した答えは、冷静な判断でも自身を落ち着かせる方法でもなく、ただひとつ。

「やられた」

失敗

→貴方はそれを、聞き取りたくなかったのかもしれない。しかし、ここは人通りの少ない静かな路地。聞こえていないわけはなかつただろう。

シャッター音だ。額を嫌な汗が伝う。状況把握のため思考する脳が導き出した答えは、冷静な判断でも自身を落ち着かせる方法でもなく、ただひとつ。

「やられた」

「あは、本当にエンコーしてたんだ。PCくん」

振り返ればそこには、若い男が立っていた。

顔立ちからいって、貴方とそう変わらない…大学生、だろうか。

スマホを構えて艶美に微笑む彼は、心底おかしそうにくつつと笑っていた。

<アイデア>

成功

→貴方は思い出す。ああ、彼は。

同じ大学の同学年に在籍している、KPCだ。貴方も名前くらいなら聞いたことがあつただろう。優秀と言って差し支えのない学生であり、知る限りでは友人も多いはずだ。

(※ここはKPCの人となりに合わせて描写を適時変えると良い。ぶっちゃけ同大学であれば学年違くていい)

失敗

→貴方の大学で見たことがある気はするが、名前までは思い出せない。

そんな彼に援交現場を目撃され、挙句写真まで撮られてしまったことを、漸く貴方は理解する。

<SANc 1/1d2 >

• KPCだよな？

「覚えててくれたんだ？嬉しい」

• 誰？

「え？KPCって、名前聞いたことない？酷いなあ、同じ大学の同学年じゃん」

(そう言われれば思い出せてもよい)

• どうして撮った？

「PCくん知らないの？君がエンコーしてるかもって噂、大々的になってわけじゃないけど流れてんの。それ聞いた矢先に決定的瞬間って…そりゃ撮るでしょ」

・どうする気？

「どうもしないよ、強いて言うならちょっと楽しいことに使うだけ」

・自分に恨みでもあるのか

「別に？君がどうなろうと知ったこっちゃないけど」

KPCは動揺する貴方を心配してか、スマホを上着のポケットにしまって肩を叩く。

「まあこのまま話しても埒があかないし、ここ暗くて危ないしさ」

「適当な店入って話そう？悪いようにはしないよ、奢るし」

そう促されるまま、貴方はKPCに手を取られ、路地を抜ける。

KPCは慣れた足取りで駅前まで向かい、そのまま近場の居酒屋を指差した。

(※話したい理由は適当にでっちあげていい。KPCはPCに異常執着しているため、ちょっといいをかけたいのだ。

断ろうとするなら写真をちらつかせて強引にでも連れていく。興味本位で話がききたい・友達になる～程度のノリだが、そこらへんはKPが決めてOK)

■ 居酒屋

貴方達は店内に入る。食器の音や話し声が入り混じり、多少声を張らないと店員にも気付かれないだろうと分かる。店内はカウンター席とテーブル席で分かれており、その奥の暖簾越しに個室の座敷がいくつか覗いているようだ。

KPCは店員に「2名で」と伝えると、そのまま貴方を奥へと連れて行った。

「やっぱり仕切られてると落ち着くね、あっちはあっちで楽しいんだけど」

などと言いながらKPCは蛇腹折りのメニューを開き、視線をやっている。

(※RPなど。逆に普通の世間話やら学校の話やらをするといいかも。ここで写真について等聞かれても「まあ今はいいじゃん、時間はあるんだしさ」と躲す)

しばらく会話を交わしていると、注文した皿を店員が運んでくる。
KPCは定番の鳥軟骨やアヒージョ等、他にも酒を頼んでいたようで、芳ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。こんな状況だというのに、腹の虫がぐうと鳴った。
緊張と緩和は得てして、人間の快楽をコントロールするものだ。何をされるかわからないと言う不安の中、貴方はたしかに口に運んだ食事によりほっと一息つくことだろう。

「で、これ何回目なの？」

「こんなに手出すってことは相当金困ってる？」

(※ここは好きなように質問攻めなりお話なりしてよい。話の流れでお酒を飲ませるようにしたいところ。のちの描写に違和感が無くなるので…)

■ 酩酊

ふと、甘い匂いが辺りを包み込む。

ここは居酒屋だというのに、先ほどまでの濃い脂の匂いが消え去り、脳が痺れるほどの甘美な香気が。

緊張からか、不安からか。

貴方は随分と、美酒の魅惑に身を任せてしまったのかもしれない。この芳香はそれ故の幻臭なのだろうか。

場違いに幸福な倦怠感が貴方の意識を白濁させる。

KPCの胡乱な瞳がじっと貴方の瞳を捉えた。何を考えているのか、どのような感情を映し出しているのかすら霧がかかったかのように分からない。

…彼の紡ぐ言葉が、貴方にどのような温度を与えようとも。

「ねえ、PCくん」

ゴクリ、逃げるように咀嚼していた肉が、噛み砕ききれぬままにずるりと喉を通過する。ああやはり、ここが安息の地であるはずがなかった。

「だめ？」

冷たくなった指先をすり、と弄ばれる。ぼう、とした脳みそでは反抗することすら思い浮かばず、貴方はされるがまま、節くれだった手で五指を絡め取られてしまう。

指の股が擦れるのが妙に心地よくて、気持ちが良くて、ずくりと、下腹が疼くのを感じた。

ただの結び目となったそれをぐいと持ち上げ引き寄せたKPCは、酒で熱くなった頬を擦り寄せ、誘うように微笑んだ。

バランスを失った天秤は、最も容易く快樂へと傾いてしまうものだ。

酩酊は貴方を微睡へと引き摺り込み、思考をプツリと切り落とす。

そうして、貴方の視界は完全にブラックアウトした。

<聞き耳>

成功

→何かをぶつぶつと呟く男の声が聞こえる。

聞こえる声は微かだが、KPCでも貴方のものでもない分かる。

失敗

→人の声らしいものが聞こえる

(研究員の詠唱)

■ 夢の始まり

意識が覚醒する。

脳が、揺れている。視界が、ぼやけている。

噎せ返るような性の匂いが鼻腔を蕩かしていく。空気の漏れるような、途切れ途切れのよがり声が貴方の意思とは関係なくこぼれ落ちた。

貴方にのしかかるのは、先程出会ったばかりはずのKPCだ。低く掠れた声、時折喜悅を滲ませて笑っているように思う。

一定の間隔で聞こえてくる粘着質な水音が鼓膜を犯し、行為の淫靡さを理解する。引き抜かれるたびに奥が切なく疼いて、再び腰を打ち付け張り出た凸部を擦り付けられるとあまりの快感に全身が粟立ってしまう。

そうして、最も欲していた場所を強く突かれる。甘い痺れを伴い神経が焼き切れる心地がした。

ゆさゆさと上下する視界で、KPCと目が合った。

「ん、おはよ～、PCくん」

・ どうしてこんなことに

「え？だってそういう雰囲気だったじゃん、きもちーことしよって」

・ 許した覚えはない

「そーだっけ？…でもそんなこと言っているの？」とスマホの画面を見せてくる。やはり、言い訳もできないような援交現場の写真をバッチリ撮られている。

・ 金銭を要求するなど

「え～？嘘、トモダチとのコミュニケーションにすらお金要求するの？俺別に君のパトロンじゃないよ～」

「求めてきたのは君も一緒でしょ？」

などと躲す

・ ここはどこ

「ラブホ。やっすいとこだけどね」

■ 加害欲

突として、ガチャリと金属の冷たさと身に覚えのない窮屈さを感じる。

そちらへと意識を向けた貴方はそれを視認し、一気に体から血の気が失せた。

…首輪だ。

一体、何故…？そう思考する間もなく、首輪から伸びる鎖が引っ張られ、背中が大きく反り上がる。痺れにも似た強い痛みが背骨にはしり、鼻奥がツンとしたかと思えば、熱が込み上げ溢れ出す。

身体の支えが首にめり込む首輪のみとなり、貴方の喉仏が強く圧迫される。抗議の声をあげようにも、出るのは悲鳴紛いの嬌声だけだ。

「あは、苦しそうだけど大丈夫？」

「だめでしょ、気抜いちゃ。まだ終わっていいなんて言っていないよ」

・ どうしてこんな真似を？

「どうしてって…楽しいからに決まってるじゃん」

・ なぜ首輪を？/これはあなたの趣味か？等

「このラブホ色々置いてあってさ〜…。せっかく金払ってるし、あるなら使った方が面白いでしょ？」

(※これは本当に遊びの為に拘束してみちゃった♪というだけ)

・ 前にもこんなことした？

「俺と君は初対面みたいなもんでしょ」

(RPが済んだタイミングで)

「いいから、大人しく言う事聞けよ」

そう囁くと、KPCはそのまま貴方の耳に噛みついた。

甘噛みなんて生易しいものではない。KPCの歯は、食い千切らんとする強さで貴方のそこに食い込んでいく。

じゅわりと熱く紅に染まった耳輪から血が滴り落ち、輪郭を伝った。

KPCはその鮮血を丁寧に舐めとると、恍惚とした溜息を漏らし喉の奥で笑うのだ。

<アイデア>

成功

→貴方はこの光景に妙な既視感を覚える。この痛みを覚えている、とも感じるかもしれない。

失敗

→何を考えているのか分からないという不気味さは想像を絶する。

貴方は貴方を支配する彼に強い恐怖心を抱くだろう。

<SANc 0/1 >

(※思う存分プレイしようゾーンです。煙草押し付けたり殴る蹴るなどしたり好きにして大丈夫です。積極的に傷つけましょう。なお、この時HP減少はしなくて良いものとします)

【DVダイスロール】

描写例。任意でお使いください。(勿論PLに共有した上で選ばせるのも、途中でRPを挟むのも可。)

ダイスを振るごとに正気度喪失が発生するので、その旨はPLに伝えておくこと。その上で何回でも振ってよい。

1D6

1. 腹部を蹴る

彼が徐に、貴方の腹部に膝を乗せた。体重をかけてぐっと押し込まれ、貴方の薄い腹が随分と沈みこむ。体内の柔らかな果実が今にも弾けそうなほどの圧迫感、彼の熱を受け入れた時よりも直接的な死を予感させた。こめかみで脈打つ血流が警鐘を鳴らす。

「あ、その顔すき」

抵抗しますか？

→する場合、<POW*5> (実際に抵抗できる気力があるか否か)

成功

→命の危機に瞬発的な力が出たのか、貴方は勢いよく彼を突き飛ばそうと飛び起きた。しかし運良く…いや悪くだろうか。緩められた彼の力により、反動でベッド下の床に転がり落ちてしまう。打ちつけた身体が酷く痛む。

「元気だね～。てか何？不特定多数の奴とはやんのに俺がダメな理由教えるよ」

しない、または技能に失敗

→貴方は恐怖により動くことができなかったのかもしれないし、彼が飽きるのを待とうと抵抗を諦めたのかもしれない。どちらにせよ、その矢先に彼の力がふっと弱

まる。…飽きたのか。そう、思ったかもしれない。瞬間襟首を掴まれ、身が乱暴に床に投げ出される。呆然とした貴方の顔を彼は覗き込んだ。

「マグロって商売にならない？」

そう笑うと、彼は貴方の腹部を事も無げに蹴り上げた。息が止まる。刺すような酸味の気配に身悶えるが、抗おうとした理性の余韻がそれを飲み下した。気持ちが悪い。ゴッ。鈍痛。気持ちが悪い。ゴスッ。鈍痛。吐き気。白熱。思考の停止。バキッ。肋。肋を掠めた。ゴッ。内臓。果実が弾けた。笑顔、笑顔、彼の、笑顔。薄い唇。覗く赤。せり上がる鉄錆、悪心。鈍痛。鈍痛。鈍痛…

ふっと、視界が一瞬暗転する。

次に目を開けた時に一番に視認したのはKPCの顔だった。いつの間にか、ベッドの上に引き戻されていたようだ。

「あ！よかった、死んじゃったかと思った…」

「痛かったよね、ごめんね？」

技能に成功していた場合→<SANc 0/1 >

抵抗しなかった、失敗していた場合→<SANc 0/1d2 >

2.顔や腹を殴る

「PCくんってさ～、普段どういう顔で媚び売ってんの？」

動けずにいる貴方に顔を寄せ、突然そう問いかけてくる。よく知りもしない男の顔が眼前にあるというだけで居心地が悪いのに、好奇心ひとつで自分の内側を探られるような言動に背筋が凍る。その揺らぎを感じ取ったのか、彼は一呼吸おいて貴方の頬を掴み上げる。

頬骨にゴリッとKPCの指がめり込み、口内の肉が歯にめり込む。

「あはは、こんな顔かな」

掴み上げる力に反して柔らかい彼の表情は、いっそ不気味だ。痛みに顔を歪ませつつ、懸命に目を見開く。次の挙動を伺えば、彼のもう片方の腕が持ち上がるのがはっきりと見えた。

目の前が瞬間的に明滅する。

脳天が貫かれたような衝撃に、神経の信号が切れかけたのだ。彼の、その手で。

ゴッ、と鳴り響く鈍い音。二度目のそれで意識が戻り、もう一発を警戒した貴方は彼の顔を見上げる。しかし、見当はずれに彼は穏やかだった。まだ玩具が壊れていないことに安心したように、たった今自分で殴ったはずの頬を撫でられる。

「あ、ごめん…エンコーっていうとコレ商売道具だよな？」

「こっちだったら許してくれる？」

彼の手は貴方の肢体をゆるりと撫で降ろし、腹に添えられる。臍の部分に沿った中指が沈み込めば、腹の内の神経が圧迫されて痛みが走った。

振り上げられたこぶしはやけにスローモーションに見える。

しかし、息が止まるのは一瞬だ。臓器を押しつぶされて、胃の内容物がせり上がってくる感覚。殴られた皮膚の痛みよりも、胸が浮くような不快感が勝って貴方は大きく咳き込んだ。呼吸を試みようとするだけでも、引き撃った痛みが腹を痙攣させてしまうことだろう。

幾度となくそれは繰り返される。胃が、腸が、肺が、それを守っているはずの骨が、体の内側全てが、口から零れ落ちそうだと錯覚するほどに何度も、何度も何度も何度も…。

生理的に涙とその他の体液でぐちゃぐちゃになった貴方を、外から、内から蹂躪した彼は、貴方の腹にぐりぐりと中手骨を押し当てる。

傷をえぐられるような行為に、次第に意識が遠ざかっていくことだろう。

ふっと、視界が一瞬暗転する。

次に目を開けた時に一番に視認したのはKPCの顔だった。

<SANc 0/1 >

3.首絞め

KPCに深く杭を刺されたまま揺さぶられる貴方の、白く細い首にKPCの手がかけられた。

ぼう、とした頭では考えが巡らないが、人間の本能として急所に他人の手が伸びるのは避けたいのだろう。ぞわりと、警鐘がわりの悪寒が走った。咄嗟に彼の手から

逃れようと藻掻いたが、身体に跨られて逃がすまいと固定されてしまえばどうしようもない。

そのままぎゅう、と締め付けられる。援交相手にするような媚びた声などとうに出ず、突かれた反動で潰れた蛙のような嗚咽が口から漏れ出る。

酸素が枯渇するほど貴方の意思とは裏腹に奥がきゅうと締めまり、彼の形がはっきりと認識できてしまう。

「かわいい、それくらい大人しいのも好きだよ」

KPCは不気味に口元を綻ばせながら、さらに力を強める。

背中に突き抜ける快感を逃すべく悲鳴をあげようとも、死に恐怖し許しを請う声をあげようとも、声帯を震わせるだけの空気など既がない。

舌は喉の奥で固く縮こまり、唾液をせき止めては溢れさせるだけの役立たずの防波堤となっていた。

頸動脈を押さえて気持ち良さだけを求めるお遊びの行為ではなく、これは本気の殺意だ。

チカチカと点滅する赤色は、肺が、脳が、酸素を求める叫びなのだろう。急速に冷えていく手足の感覚は現実味がなく、身体から意識が分解されていくのもどこか他人事のように感じた。

擦り切れる、擦り切れる。

壊れたレコードのように途切れ途切れの歌声が、歌声と呼ぶにはあまりに苦し気なそれが。

ふっと、視界が一瞬暗転する。

次に目を開けた時に一番に視認したのはKPCの顔だった。

<SANc 0/1 >

4. ハメ撮り

脳も心臓も、内臓の全てを焼かれ拷問されるような行為の最中、ぴこん、と間抜けな音が鳴った。白い靄がかかる頭の中でもまだ思考できる部位が、熱をあげながら回転する。そうして貴方は、間抜けな音の正体を確信した。

……スマートフォン、ビデオカメラ。の、起動音である。

KPCは腰を打ち付けながら、さも当然であるかのようにスマホを構えていた。丸く小さいレンズは貴方を視姦しているかのように、望まぬ快樂に喘ぐ貴方の顔を反射しているのだった。

この動画の行く先を想像して、背筋が凍る。

「PCくん、折角だから笑ってよ」

拒む→

<POW*4>（実際に拒む気力があるか否か）

成功

→貴方は彼の構えるカメラから顔をそらし、顔を枕に埋めて口をつぐむ。絶対に顔を映されてなるものかと、絶対に声をだしてやるものかと、押し殺すように。KPCはそれが心底面白いのか、犯している最中とは思えぬ喜色を浮かべて貴方の耳元に囁いた。

「笑顔の作り方、知ってる？」

拒まない、または技能に失敗

→拒否しようとも身体がいう事を聞かず、彼の言う事に屈服する。不自然に釣り上げた口角が、ちゃんと笑顔を作っているのかすら自分では分からなかった。そして何よりも彼の反応をうかがって怯えるしかない自分自身にいら立ちが募り、どうしようもなく情けなくなってくる。その表情の機微を、カメラは捕え続けているのに。

「売淫ならもっとうまく笑いなよ」

途端。ガッ、と口内にKPCの親指が滑り込み、無理矢理口角を持ち上げられる。

不自由になった舌の上に唾液がたまり、ぼたぼたと垂れ落ちた。

口が裂けそうな鋭い痛みに生理的な涙がこぼれれば、再び強く杭を打たれる。何か大事なものが弾けん飛んだような気がした。暴力的なのに、突き上げる快感に紅潮する身体も、内臓を浮かせて湧き上がる熱情も酷く惨めたらしくて。

必死に掌を翳してレンズの視線を遮ろうとするが、そうするたびに力が入らなくなるほど揺さぶられ、敢え無く力尽きてしまう。

記録されている、だれにも言えない、秘密が、彼に犯されて泣いている、自分のどうしようもない醜態が。

それでも、突き昇る絶頂に逆らうことができず、なんども、なんども痙攣する。

考えることを放棄するほど犯された末、地獄の撮影会は漸く終わった。

技能に成功していた場合→<SANc 0/1 >

拒まなかった、失敗していた場合→<SANc 0/1d2 >

5.より乱暴に犯す

止まぬ律動に、短い呼吸を繰り返しながら内壁を擦り合わせている。望まぬ辱めを受けているのにもかかわらず、快感を拾うのが上手な身体は突き昇ってくる熱の魅力に抗えないでいるのだ。

身体を中心に据え置かれた快樂の的に、あと一步のところまで届かず、掠める。ああ、いっそ、それならば…このまま最奥まで串刺して、終わりにしてしまえばいいのに。そんな熱欲が頭をよぎる。

「物欲しそうな顔、どうしてほしいの？」

(即答できなければすぐに描写を挟んでもらって構わない)

「ねえPCくん……遅い」

もう随分と前から純潔とは呼べぬ貴方の胎内を、まるで初物を割り開いたときのよ
うな痛みが駆け巡った。最奥を強く突かれて、体内に残っていた酸素が全て吐き出
される。足りなくなったそれを必死に吸おうとするも、うまくいかずに餌を待つ鯉
のようにぽっかりと口を開けるのが貴方の限界だった。

休む間もなく杭が打ち付けられる。内臓を鈍器でくまなく叩かれ、形が変わってし
まうのではないかと煩慮するほどに。激しく、烈しく、はげしく。

相手の身勝手に上下する身体を俯瞰している心地だ。こちらの事情など全く理解す
る気もないような獣の旋律が、己の身体をバラバラに分解してしまっている。既に
達しているのかすらも不明瞭なほど、昇りつめる快樂すら摩擦熱の痛みが塗りつぶ
す。いっそ強く熱が押し込まれれば、予感するのは命の終焉だ。貴方は身体を弓
なりにして痙攣し、意識を飛ばしてしまうだろう。

ふっと、視界が一瞬暗転する。

次に目を開けた時に一番に視認したのはKPCの顔だった。

<SANc 0/1 >

6.イラマチオ

突然引き寄せられ、彼の下腹に乗り上げるような体勢にされる。異形の肉が血を集め、欲を欲しているのをありありと見せつけられるだろう。

見慣れたものだが今は恐怖心が混在していて、
貴方は逃げ出したい衝動に駆られた。

「ここのご奉仕ってやつ、やったらいくら貰えたの？」

「そう…まあ、君に選択肢はないわけだし。ねえ」

口淫しない/強く拒む→<POW*4>（実際に拒む気力があるか否か）

成功

→KPCは不気味に瞳を細めた後、嫌に優しく貴方の頬から耳にかけてを撫でおろした。貴方が感じている恐怖、それはいつ何をされるか分からないという未知の恐怖であろう。身構えている貴方を見て、彼はクスリと笑う。

「じゃあ、動かないでいいよ」

口淫する、または技能に失敗

→塗れた唇を彼にあてがい、ゆるりとした緩慢な動きで柔く食む。口内を蹂躪する熱さに身を焼かれながら、彼が満足するまで行為を続けるだろう。はあ、と、頭上から溜息が聞こえる。

目線を上に上げれば、KPCは心底つまらなそうに貴方を見下していた。

「下手くそ」

ガッと後頭部を強い力で掴まれれば、喉奥が一気に熱を持った。こともあろうか彼は、貴方の頭を好き勝手に動かして喉奥を犯し始めたのだ。

苦しい、痛い、悔しい…それら全てがダムを崩壊させる強勢となって、塩辛かったり粘土を帯びた体液が貴方の目から、鼻から、口から溢れ出した。溺れたようなくぐもった声が脳内に響き渡る。

身体の反射により、異物を飲み込もうと波打った喉の筋肉が彼の火照りを締め付ける。

その瞬間に彼が果てたのが分かったが、胃液交じりの生臭いそのの不快感と言ったら、貴方の意識を攫うのには十分すぎる衝撃であった。

ふっと、視界が一瞬暗転する。

次に目を開けた時に一番に視認したのは、楽しそうに笑うKPCの顔だった。

「ごめんね、大丈夫？でも次はちゃんとやろうね」

技能に成功していた場合→<SANc 0/1 >

自分から口淫した、失敗していた場合→<SANc 0/1d2 >

■ 反抗

…どれ程の時間がたっただろうか。何度も果てて疲弊しきった貴方は、「それ」を視界の端で辛うじて捉える。

—— 綺麗な細工の施されたガラス製の灰皿。

それは、この暗がりでも僅かな光を反射し、貴方に存在を訴えかけてくる。

<アイデア>

成功

→この灰皿でKPCの頭を殴りつければ、どうにか気絶させることが可能なのではないかと思いつく。隙を見てバレないように手に取る必要があるだろう。

失敗

→この灰皿でどうにかKPCを止められないだろうかと思う。

【殴打を試みる場合】

<隠す> ※失敗前提

成功

→貴方はKPCが時計を注視している隙を見て、灰皿を手に取ることができる。背と枕の間にそれを隠し、機を窺う。

しかしゆらりと、KPCが貴方を見やった。

「そういうところ好きだけどさ」

そう言って彼は貴方の手首を捻り上げる。ギリギリと、指先が冷えるほどに強く。

引き攣った貴方の顔を一瞥して彼は薄く笑った。

失敗

→貴方はKPCが時計を注視している隙を見て、灰皿に手を伸ばした。しかし、焦燥からか手指がうまく動かず、ガタンと物音を立ててしまう。ゆらりと、KPCは貴方を見やる。そうして薄く笑い、不出来な犬を宥めるように口を開く。

「PCくんで本当に、馬鹿だね」

嘲笑を含んだその声を聞いた途端、ゾワリと身の毛が逆立つ。

KPCは、思わず取り落とした灰皿を事も無げに拾い上げて舐めるようにそれを見やる。

コンコンと強度を確かめるようにサイドテーブルで打ち鳴らしたかと思えば、灰皿の縁を持ったまま貴方を無理矢理引き倒し馬乗りになった。

視線がかち合う。

「ね、さっきは俺に何しようとしたの？」

貴方が返事をする間もなく、大きく振りかぶられた灰皿が頭蓋に沈み込む。

ぐらり、視界が回転し、平衡感覚が失われていく。

「なぐられている」ことを認識するのに暫し時間がかかった。なぐられている、髷られている、殺される、壊される。そんな思考が脳内を巡っては真っ白に散ってしまう。断続的に振り下ろされる灰皿がそれを許さないのだ。KPCは穏やかに目を細め、まるで子供の戯れのようにお道化た声でカウントする。

「いっかーい、にかーい、頑張れ頑張れ」

その表情には確かな興奮を感じ取れ…ああ、この人は。貴方は理解を手放すしかなかった。

ガン、ガン、とそれは聞くに耐えない音を立てて貴方の頭をかち割っていく。どろりとした血液が額を伝い、鼻筋を通り過ぎ、顎から垂れ落ちた。

<アイデア>

成功

→これほどの力で殴られれば早々に死んでもおかしくないと思う。それなのに、貴方にはまだ息がある。

鈍い痛みと、何かがぼれ落ちる感覚はあるのに、生きている。

それは酷く不気味であった。

<SANc 0/1 >

失敗

→これほど強い力で殴られていると言うのに、貴方はまだかろうじて意識を保っている。

人間は案外強固に作られているのかもしれないと、どこか他人事のように思う。

熱く燃えるような、痛みとも快樂ともつかぬ感覚が脳天から指の先までを支配していた。それが急激にさめていき、突き放されたような冷たさだけが残る。

視界がチカチカと赤く点滅したかと思えば、貴方の意識はそのまま暗転した。

■ 目覚め

ガチャン、と扉が閉まる音で貴方は目を覚ます。最後の記憶を思い起こし、ガンガンと痛む頭を押さえる。あれは夢だったのだろうか。殴られた感触は、あの痛みは…そう考えながら貴方は身を起こそうと片肘に体重を乗せるだろう。

じゅわり。

瑞々しい果実に齧りついた時のような、泥濘に足を踏み入れた時のような…何方ともつかぬ湿った音が耳につく。今まさに起き上がらんとついた肘、その下からだ。

それに意識を向けた途端、鮮烈な錆臭さが鼻をかすめた。まさか。

そう思ったならば、首は自然とそちらを見やってしまうのだろう。

高級感のある赤色の天鵞絨、などではない。触り心地もさほど良くはない白いシーツに広がっているのは、紛れもなく、血液だった。その横で血が混じった薄桃色の液体は、貴方の脳を満たす脳漿ではないか。

さほど医学に詳しくない探索者であっても、この出血量では助からないという事は想像に難くない。

…では、誰の？

とろりと、絹糸のような血が額から垂れる。頬を掠めて唇へと辿り着いたそれは、容易く貴方の口内に侵入し、味蕾を支配した。

それでも、貴方は何故だか生きている。

<SANc 1/1d4>

■ 探索パート（部屋内）

探索箇所 [部屋全体 / ベッド / 自分 / 鏡（バスルーム）]

（※扉を調べたいと宣言があった場合、鍵が閉まっていて開かないことを提示する。）

○部屋全体

備え付けの家具や窓から見える建物群、少し形状は異なるが慣れ親しんだコンビニボックス。ここは所謂ラブホテルで間違いないだろうと分かる。

部屋を見渡す限り、KPCはいないようだ。

<目星>or窓を見るなどの宣言

→窓をよくよく見てみると、言い知れぬ違和感を感じる。近づいて確認してみれば、先ほどまで窓外の風景だと思っていたそれはただの写真であった。

張り付けられたように、まるで舞台セットのように用意されたハリボテ。よくあるラブホテルだと思っていたこの場所が、何処か隔絶された空間なのではないかという疑念が湧き上がってしまうだろう。

（※実際今の時間は夜中なのだが、ハリボテなので朝の風景でも昼の風景でもいい。）

○ベッド

皺の寄ったシーツが赤黒く染まっているベッドだ。脳漿により滲んだ血だまりの輪郭が見事にグラデーションを作り出している。

<医学>または<知識/2>

→血液の色味や固まり方からいって、まだ半日も経っていないのではないかと推測できる。

○自分

頬を伝う血潮から、どんな怪我を負っているのかと心配することだろう。

しかし、貴方は困惑する。

あれほどのことをされたのにも関わらず「頭痛がする」
だけに留まっているからだ。

自分で弄る限りは傷らしきものも見当たらない。

また、直前の記憶でも存在した首輪は未だあなたの自由を拘束していた。

<目星>

→鎖の末端、皮の持ち手がベッド脇に捨て置かれている。手錠などが嵌められているわけでもないようだ。

<アイデア>

→監禁目的というよりは、
まるで遊んだ玩具を片付けていないだけのように感じる。

(※ただのジョークグッズなので簡単に外れる。荷物について言及があった場合、衣服のポケットに普段しまっている物くらいなら持っても構わない。武器の類はシナリオ上都合が悪いので、持っていないことにして頂きたい…。尚、携帯の充電は切れている)

○鏡（バスルーム）

バスルームの鏡で確認しても、やはり傷らしきものは見当たらない。
血の跡はくっきり残っているのにだ。

<アイデア>

→まるで短時間で傷が塞がったみたいだ、と思う。

<目星>or<幸運>

→備え付けのシャンプーの横に、剃刀が一本置いてあることに気が付く。市販で売られているようなI字型の剃刀だが、セーフティーガードがなく、刃の部分が全て剥き出しになっている。誤って切ってしまう可能性が高いため慎重な扱いが求められるだろう。

<アイデア>

→今は不在だがKPC…彼が帰ってきたときに、身を守るものは必要だろうか。剃刀を見やり、そんなことを思うだろう。

(※所持した場合のみ、「イベント：剃刀を所持している」が発生する。)

■ 全ての探索を終えた

ガチャリ。

背後から鍵の開く音がする。

貴方が振り向けば、小さく欠伸をこぼすKPCが立っていた。

「んー、あ、起きたんだ、PCくん」

「腹減ったから飯買ってきたよ。食う？」

あの時のことなどなかったかのように、貴方に白いビニール袋を差し出してくる。中身は普通のコンビニにあるカップラーメンやパン。…その優しい色味の中に、黒く光を照り返すパーラメントが目をついた。

渡されたものを食べるなら、食べ慣れた味が口の中に広がる。

至って普通の食事のようだ。

・暴力について言及する

「あー、ごめん。あそこまでやるつもりはなかったんだよ…痛かった？」

(※半分シャンに操られていたため記憶が曖昧。曖昧なので上辺だけ謝っている。シャンに操られずとも暴力を振るう性質なので真に反省はしていない。)

・窓について尋ねる/ここに来た過程を聞く

「窓？…なんだこれ」

「だからそういう流れだったから…あれ、でもどうやって来たんだっけ」

(※KPCも初めて気づいた様子。何故この場所にいるかを詳しく聞くのであれば、KPCも前後の記憶がはっきりしないことも告げる。ラブホのある場所についても曖昧である。)

・どうやって食事を買ってきたのか/ここは密室じゃないのか等

「そのへんのコンビニで」

「よく分かんないけどホテルの部屋ってのには間違いないみたいだし。外には出られるんじゃないの？」

(※正答は「夢の中だから」なのでコンビニで買ったという認識は間違いない。ただ、次に部屋を出た時は研究所廊下になる。)

・何故自分なんだ/何故怪我が治っているんだ

「?面白いな～って思っ」

「え、知らない…てかマジじゃん、なんで？」

(※PCへの執着を発症しているが自覚はない。ただ、決定的な瞬間の写真を撮られてしまった以上、仮にこの狂気が治まってもお気に入りの玩具として扱いつけられるだろう。)

※基本的にKPCはPCと同じ程度しか情報を持っていない。差があるとすれば視点の違いくらいなものなので、そこはKPが思うように回答して貰って構わない。

※ひととおりRPが済めば順次シーンを進める。剃刀を所持している場合は必ず下記イベントを挟んでから「■探索パート(研究施設)」に移行すること

■ イベント：剃刀を所持している

※部屋内の探索にて剃刀を「拾って、その上で所持している」場合に発生するイベント。

「じゃあそろそろ出よ」

軽く笑って、彼は扉へと向かっていく。貴方もその後を追って部屋を出ようと歩みを進めた、その瞬間。

甲高く、金属の弾む音がする。その音の根源に貴方はすぐに気付くだろう。バスルームから持ち出した剃刀だ。

「…何の音？」

貴方が何と返答したにせよ、彼は身を翻しこちらへと歩いてくる。

<隠す>

成功

→咄嗟に剃刀を拾い上げ、彼から隠すことができる。

彼は訝しげな顔で貴方の顔を見つめているが、何が落ちたかまでは確認できなかったようだ。

「ねえ、何か落とさなかった？」

(※PCが誤魔化すRPをした後は適当なところで切り上げて良い)

「まあいいや、いこ。PCくん」

失敗

→咄嗟に剃刀を拾い上げようとするが、一歩遅かった。